

加能ガニや香箱ガニは、漁期が冬期間であるため、悪天候や時化により操業が出来ない日が多く、水揚げが不安定です。このため、陸上水槽で生かしたまま収容する蓄養により、安定的な出荷に努めています。

ただし、蓄養は、長期間に及ぶと味が落ちたり身が痩せてしまうため、基本的には避けるべきです。

海水温約4℃で42日間、餌を与えずに収容（左の写真）した結果、体重にはほとんど変化が見られないものの、「ミソ重量」が20日間で1割程度、「うまみ」が10日間で1割程度減少しました。蓄養期間は、長くとも10日間程度に止めた方が良さそうです。

一回の脱皮で、こんなに大きく



脱皮中の加能ガニ



脱皮前（抜け殻）

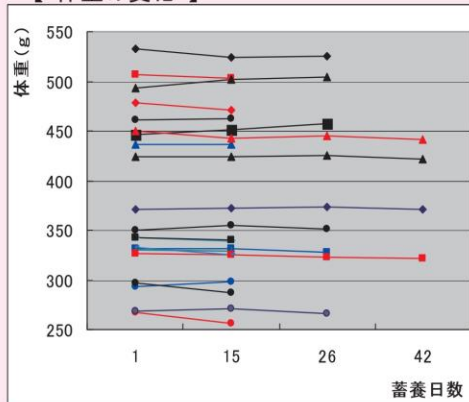


脱皮後

	(脱皮前) →	(脱皮後)
甲 幅	10.4cm	12.6cm
ハサミ幅	1.8cm	3.1cm
脚の幅	2.0cm	2.5cm

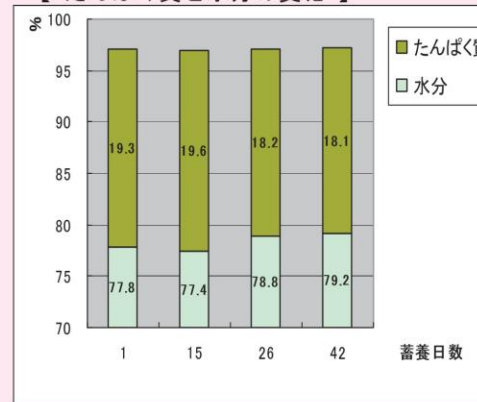
出典：石川のさかな

【体重の変化】



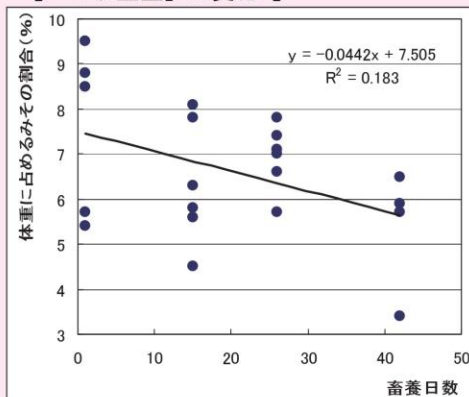
変化はほとんどない

【たんぱく質と水分の変化】



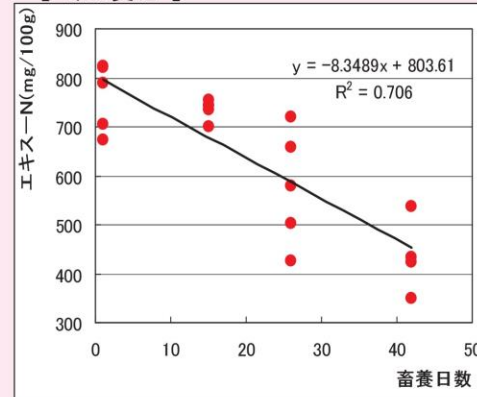
変化はほとんどない

【「ミソ重量」の変化】



個体差は大きいですが、20日間で1割減少

【味の変化】



個体差は大きいですが、10日間で1割減少



試験水槽に収容した加能ガニ



蓄養中の加能ガニは、水温などの環境に大きな変化があると、脚等を自ら切り離すことがあり、商品価値も大きく下がります。

蓄養中は、水交換等を慎重に行う必要があります。